

新しい形のメディア&コミュニティ「MASHING UP」

インクルーシブな社会を目指す取り組みとは

～MASHING UP 編集長 遠藤祐子さん

2021.12.10

さまざまなジャンルで活躍されている方々に、広く SDGs にどう取り組んだらいいか、ヒントを聞くインタビュー企画。

今回は、インクルーシブな社会づくりに貢献するメディア&コミュニティ「MASHING UP」の編集長・遠藤祐子さんにインタビュー。「MASHING UP」立ち上げまでの経緯や、インタラクティブなイベントをつくるための工夫、多様な価値観を持つ人を“MASHING UP（混ぜ合わせ）”する遠藤さん流の方法などをお聞きしました。



遠藤祐子氏

MASHING UP 編集長。株式会社メディアジーン編集部門執行役員。

女性誌のライターを経て、2005 年にカフェグローブ・ドット・コムに入社。Cafeglobe の副編集長、編集長を務める。その後、2012 年 8 月よりメディアジーンで、Cafeglobe 編集長、MYLOHAS 編集長を務め、2015 年 7 月からは女性メディア統括プロデューサーに。同年よりメディアジーン執行役員、2019 年より MASHING UP 編集長としてプロジェクトを統括している。

新しいメディアの形を模索して生まれた「MASHING UP」

——現在、「MASHING UP」の編集長を務めている遠藤さん。どのような経緯で今の活動を始められたのでしょうか？



(写真／撮影：中山実華)

遠藤：私はもともと女性誌のライターをしていました。あるとき、仕事で女性起業家の特集記事を担当することになり、カフェグローブ・ドット・コム（※）の矢野貴久子さんに取材をする機会に恵まれました。

当時この会社が運営していたウェブマガジン「Cafeglobe」は、オンラインメディアが少ない時代においては、女性向けオンラインメディアとして“ワンアンドオンリー”とも言える存在。

ファッションや美容などの女性誌的な内容だけでなく、政治、経済、環境問題といった社会的な内容も広く扱っているメディアでした。

私も読者の一人でしたが、矢野さんに取材した際、「うちで書かない？」と誘われたんです。元々私は女性誌が好きで、当時の仕事にもやりがいを感じていたのですが、何かに追われるような気持ちで制作し続けることに疲弊するようになってきていて……。 「好きなことがやれるよ」という可能性を感じさせる誘い文句

にも魅力を感じて、カフェグローブ・ドット・コム（※）へ入社することを決めました。

（注釈）

※カフェグローブ・ドット・コム：矢野貴久子氏、青木陽子氏、南ゆかり氏の3名が1999年に設立。大人の女性をターゲットにしたオンラインコンテンツの制作・運営を中心に、マーケティング事業やウェブソリューション事業も展開していた。

入社してからは、ビッグイシュー日本とコラボして記事を書いたり、政治や経済に関する連載を担当させていただくなど矢野さんからの言葉通り本当に好きなことをやらせてもらえました。海外出張に行くこともしばしばあって、若手でも大きな仕事を任せてもらえる環境でしたね。また、小さなベンチャー企業だからこそ、経営の話などを耳にする機会も多くあり、メディアビジネス全体を見通して仕事ができただけでなく、私にとってはとてもいい経験になりました。

遠藤：その後、私は「Cafeglobe」の編集長になったのですが、東日本大震災の影響もあって経営が悪化し、2012年に事業が立ち行かなくなりました。

事業譲渡という形でメディアジーンにジョインし、新たなフィールドで

「Cafeglobe」を運営することになりました。事業方針に沿って、キャリア女性向けメディアとしての役割を模索しながら運営し、私も編集者、プロデューサーとして関わり続けていました。

後任にバトンタッチしたのち、最終的にもう一度私自身が「Cafeglobe」を担当したときに、「このメディアは本当にこのままの形でいいのだろうか」と立ち止まって考えてみたんです。

私が女性誌の仕事をしていたときからずっと感じていたのは、読者とメディアの関係が変わってきているということ。

「セレブリティがメディアで発信したことに憧れる」という一方通行な図式はもう壊れてきていると実感していました。

もちろん他にも理由があるにせよ、この関係性の変化が自分たちのビジネスのあり方と関係がないわけがない。

これからは、読者とのインタラクティブなコミュニケーションや、他のメディアとのコラボレーションなど、今までとは違うやり方が必要になってくるのではと考えていました。

遠藤：また、広告中心ではないメディアビジネスや、ダイバーシティや社会課題を扱う、女性が牽引するインタラクティブなメディアができないかと具体的に考えるようになっていました。

ちょうどその時期に WEF という女性活躍に関するカンファレンスを「Cafeglobe」が中心となって開催する機会があって。

その後、「MASHING UP」のパートナーで、ファウンダーでもある現 fermataCOO の中村寛子さんが、「MASHING UP」のイベントのコンセプトを持ち込んでくれました。「Cafeglobe」主催というかたちで2回「MASHING UP」を開催したのちに、「Cafeglobe」をあらため、「MASHING UP」という新たな形でメディアをやりたいと、社内でプレゼンテーションを行ったんです。順風満帆ではありませんでしたが、女性活躍推進の機運が高まっていたり、女性に対する差別的な発言がメディアで取り上げられる機会が増えたりと、人々の「ジェンダー」に対する意識が変わりつつあることや、ビジネスにおける考え方の変化を伝えて社内の合意を得ました。

最終的には当社の代表からの後押しもあって、「インクルーシブな未来を拓く、メディア&コミュニティ」として、現在の「MASHING UP」を立ち上げることができました。

多様性とインタラクティブを意識したカンファレンス

——これまで多数のイベントを開催してきた「MASHING UP」。特に印象的だったものを教えてください。

遠藤：「Unleash Yourself（自分自身を解き放とう）」をテーマにした第一回のカンファレンスは、やはり印象に残っています。「MASHING UP」は、もともと女性向けメディアの「Cafeglobe」から生まれたこともあって、ダイバーシティの中でも特に重点を置いているのが「ジェンダーイクオリティ」という 이슈。

第一回は、海外から女性スピーカーを招いてグローバルビジネスについて話したり、メンタリングコーナーを設けて女性のモヤモヤについて考えたりと、女性のエンパワーメントやフェミニズムの要素は強かったと思います。参加者たちも相当な熱を帯びていて、「MASHING UP」は女性の活躍をはじめ、ダイバーシティ

を推進していく新しいメディアである、ということを強く印象付けたカンファレンスでした。

その後も定期的にカンファレンスを開催していますが、現在は女性のエンパワメントという当初のテーマを残しつつ、「ビジネスの中で活用できるもの」になるよう意識しています。

例えば、ダイバーシティを推進している企業が具体的にどのような制度を取り入れているのか紹介したり、世代間ギャップや多様な人材雇用について考えたり……。

さらに最近では男性の読者も増えていることから、社会の中での「男性の生きづらさ」について考えるセッションなども実施しています。

性別に関係なく、ビジネスパーソンたちが会社の中でどのようにコミュニケーションを考え、仕事をしていけばいいのか。参加者たちにとって気づきのきっかけになればと、SDGs やダイバーシティなどに取り組むさまざまな企業の事例を積極的に発信しています。



2019年11月7・8日に開催された「MASHING UP Vol.3」。キーノートスピーカーを務めた南アフリカ出身の理論物理学者・アドリアーナ・マレ博士とのトークセッション。（写真／撮影：今村拓馬）

——イベントをするときに特に意識していることや工夫していることはありますか？

遠藤：どのイベントでも多様性に配慮しています。例えば幅広い年代のスピーカーを呼んだり、政治のセッションでは偏った意見にならないよう反対意見を持つ人にも登壇してもらったりと、一面的、同質的にならないようにしていますね。あとはスピーカーの登場順を、肩書など関係なく五十音順にして掲載するなど、このプロジェクトに関わる全ての人に敬意を払いつつ、できるだけ平等に扱いたいと思っています。

また、イベントの中で参加者同士のコミュニケーションを促したいとも考えています。「MASHING UP」のイベントには、個人の参加はもちろん、30～40代の経営企画やダイバーシティ推進の担当者、会社の研修の一環として参加する若手の女性社員など、さまざまな立場の参加者がいます。

イベントではコミュニケーションを取りやすい構造を意識していて、隣の人と話しやすいよう円卓にしたり、ワークショップを必ず入れるようにしています。あいにくコロナによって、最近ワークショップは実施できていないのですが。実際、メンタリングのセッションで同じグループになった人たちが、その後も交流を続けているという話を聞いたり、カンファレンスで皆さんが積極的に発言したりする様子も目にしてきました。

2021年6月26日に開催されたオンラインカンファレンス「Women's Well-being Updates 2021」

(写真／撮影：中山実華)

一定の「場づくり」ができているのではとうれしく思いつつ、もっとできることがあるのではとも考えています。

遠藤：現在はコロナの影響で、「MASHING UP」の最大の強みとも言えるインタラクティブなコミュニケーションが取りづらくなってしまいました。昨年からは会場とオンライン配信の両方を用意してイベントを開催していて、制作コストの面でもなかなか厳しいのが正直なところ。それでも時代にあわせて対応していくと、試行錯誤を続けています。



大切なのは、対話をする 것과インクルーシブであること

——遠藤さんご自身が、多様な人たちを“MASHING UP”させるために意識していることはありますか？

遠藤：「対話」をすることはとても重要だと感じています。オープンに話をすることや相手の話に耳を傾けることは、きっと民主的な社会の基本でもあり、大事なことですよね。だからって誰に対しても「あなたの話を聞かせてください」と突撃する勇気があるかと聞かれたらそんなことはなく、100%できているとは言えないのですが……。

それでも、「MASHING UP」で掲げている「オープン&ポジティブ」は私自身も意識しています。

例えば「MASHING UP」のイベントに、他のメディアの編集長などを積極的に呼ぶようにしていることもその一つ。最初は、競合他社の方を招くことに対して、反対する意見もありましたが、メディアのビジネスモデルを変えるためには、他の業界で行われているようなオープンイノベーションのようなものも必要だと感じているんです。

競合を排除するのではなく、さまざまなメディアの人たちの話に耳を傾けて、一緒に何かできないかを考えていきたい。そのために、オープンでポジティブな姿勢で相手と向き合うことを心掛けています。

また、相手をリスペクトして対話することに加え、インクルーシブであることも非常に大事だと考えています。

しかし一方で、人を傷つけたり攻撃したりする人に対して、受け入れがたいと思う自分がいるのも事実です。それでも、自分とは価値観が違う人に対しても、まずは相手の考えを理解してみようとする必要だと考えています。

——最後に、若い世代に向けてメッセージをお願いいたします。

遠藤：皆さん一人一人が、自分にとって「幸福な人生とは何か」を考えてほしいと思います。今は必ずしも「幸福」＝「結婚して子どもがいること」ではない時代。

独身でいることや、同性同士で人生を歩むことを幸せだと考える人もいますし、家族の形に限らず「幸福」の定義は人の数だけあります。
もっと言えば、社会の中で「活躍すること」が必ずしも幸福だとは限りません。

最近、「女性活躍」という言葉をよく耳にしますが、そもそも活躍したくない人だっているかもしれませんよね。

私も別に活躍しなくていいかなと思っていて……。活躍したい人はすればいいし、したくない人はしなくてもいいと思っています。

大切なのは、一人一人が、身近な人を大切にしたり、興味があることに取り組んだり、自分が「幸福だ」と思える毎日を過ごせることではないでしょうか。

MASHING UP は今後も、多彩な人々と対話を深めることができる場として、インクルーシブな社会づくりに貢献していきます。